

### 【短報】チャグロヒサゴコメツキは夜間なにをしているのか

チャグロヒサゴコメツキ *Homotechnes brunneofuscus* (Nakane, 1954) は、本州・四国・九州に分布し、黒色から茶色を呈するやや扁平な体型のコメツキムシ科甲虫である。同属のミヤマヒサゴコメツキ類 *H. motschulskyi* group とは異なり、後翅は退化しておらず飛翔可能で、カエデの花上から見出されたこともある（大平・白石, 1998）が、基本的には地表徘徊性であり、幼虫・成虫ともに谷川沿いの石下からよく見出される（白石, 1999, 2000; 大平・平松, 2002; 大平・大川, 2009）。飼育下では夜間に動き回っている様子が観察されており、夜行性であることが示唆されているが（大平・白石, 2005）、カエデの花上からの採集例もあり、完全な夜行性ではない可能性がある。筆者は、これまで報告になかった本種の野外における夜間の特異な生態を観察しているため、ここに報告しておく。

調査地点は、熊本県八代市白鳥山の雨天時以外は水が流れていない比較的傾斜の緩やかな涸れ沢（部分的にガレ場になる）である。観察は、夜間20時から4時間、涸れ沢を登り降りして行った。

気温は調査開始時に10℃前後で、時間が経つにつれ数度低下し、寒冷であった。

観察された個体の多くは、直径十数 cm から数 m の岩の上に静止しており（図1, 2）、地表付近に静止している個体も見られた（図3）。個体同士が集合していることはなく、全ての個体が単独で静止しており、比較的近接していたとしても個体間は十数 cm 以上離れていた（図4）。また、特定の個体を数十分観察してもほとんど移動することはない。この行動は、4月下旬から5月中旬ごろの夜間に限って見られ、他の季節や日中には本種を見出すこと自体が困難であった。

上記のような行動の目的は不明である。数 m の岩の上に単独で本種が静止している様子からは、採餌を目的としているとは考えづらく、実際に採餌の場をを観察できたことはない。また多くの個体を観察しているにもかかわらず、交尾を行っている個体を全く見つけることができなかったことから、配偶者を探索しているとも考え難い。おそらく交尾は石下といった隠蔽的な場所で行っていると思われる。

本種は晩夏から秋にかけて成虫になって越冬し、

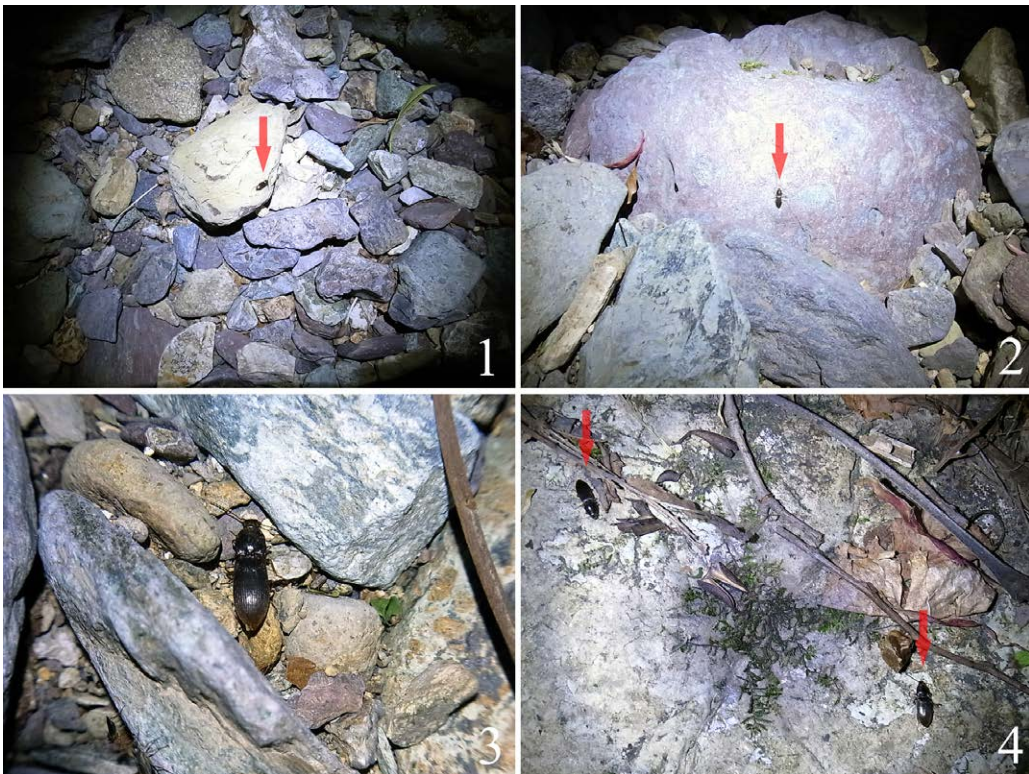


図1-4. チャグロヒサゴコメツキ *Homotechnes brunneofuscus* (Nakane, 1954)の夜間の生態。1: 石の上に静止している個体; 2: 岩の上に静止している個体; 3: 地表付近に静止している個体; 4: 近接して静止している個体。

早春から活動し始める。さらに、飼育下ではあるが成虫は2年目の春から夏頃まで生存することが知られている(大平・白石, 2005)。そのため、本種の個体数は1年目と2年目の個体の生存期間が重複し、2年目個体がまだ多く生き残っているとされる。静止行動が早春に限られて観察可能なのは、このような個体数の季節変動に関連している可能性が高いと考えられる。

この潤れ沢では、キアシヒラタクロコメツキ *Ascoliocerus fluviatilis* (Lewis, 1894) の多くの個体が、本種と似通った行動をしているのを観察できたので、あわせて記録しておく。よって、上記のような行動は森林性の地表徘徊性コメツキムシ類に共通する性質である可能性が示唆される。

他にナガゴミムシ属 *Pterostichus* spp. やホラアナヒラタゴミムシ属の一種 *Jujiroa* sp., ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* spp., チャイロコガネ属 *Sericania* spp., ヒゲナガビロウドコガネ属 *Serica* spp. などの甲虫類が見出されたが、本種のように岩の上に静止している個体は観察できなかった。

#### 【採集記録】

1. チャグロヒサゴコメツキ *Homotechnes brunneofuscus* (Nakane, 1954)  
1ex, 熊本県八代市白鳥山(標高 1,200–1,300 m), 20. VI 2009, 野田亮氏採集・筆者保管; 9exs, 同所, 1–3. V 2010, 筆者採集・保管; 34exs, 同所, 14. V 2011, 筆者採集・保管。
2. キアシヒラタクロコメツキ *Ascoliocerus fluviatilis* (Lewis, 1894)  
14exs, 熊本県八代市白鳥山(標高 1,200–1,300 m), 20. VI 2009, 筆者採集・保管; 3exs, 同所, 23. IV 2011, 筆者採集・保管; 35exs, 同所, 14. V 2011, 筆者採集・保管。

末筆ながら、調査に協力いただいた伊藤玲央氏(大分県三重市)、野田亮氏(福岡県久留米市)に厚くお礼申し上げる。

#### 引用文献

- 大平仁夫・大川秀雄, 2009. ミヤマヒサゴコメツキ属の2種の幼虫について. 甲虫ニュース, (167): 1–3.  
大平仁夫・白石正人, 1998. 愛媛県に分布するコメツキムシについて(7). げんせい, (71): 3–5.  
大平仁夫・白石正人, 2005. チャグロヒサゴコメツキの生態について. 月刊むし, 416: 30–33.  
大平仁夫・平松広吉, 2002. 南紀生物, 44(2): 107–109.  
白石正人, 1999. 秋に採集したチャグロヒサゴコメツキ. 月

刊むし, 336: 41.  
白石正人, 2000. チャグロヒサゴコメツキの生態. 月刊むし, 347: 43–44.

(有本晃一 812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学大学院生物資源環境科学府昆虫学教室)

#### 【短報】沖縄島におけるクニヨシクロツヤハダコメツキの追加記録

クニヨシクロツヤハダコメツキ *Hemicrepidius (Hemicrepidius) secensus kuniyoshii* Ôhira, 1967 は沖縄島から記載された亜種であるが、記載以後の記録はないようである(大平, 1987)。筆者らは本島で本種を採集しているためここに記録しておく。

1♂, 沖縄県名護市名護名護岳, 3. V. 1978, 有本久之採集・保管; 1♀, 同所, 4. V. 1978, 有本久之採集・保管; 1♀, 沖縄県国頭郡国頭村佐手照首山, 26. V. 2011, 有本晃一採集・保管。

第一著者が採集した個体は照葉樹林内に設置した4ワットケミカル蛍光灯に飛来したものである。本亜種が灯火に誘引された例は初めてのことであるが、本属の種が正の走光性を持つことはよく知られている。これまでの採集記録から本亜種の分布域は山原地域に限定されると予想する。ツヤハダコメツキ属 *Hemicrepidius* は近縁属も含めて全北区に分布の中心があり、国内では沖縄島以南に分布しておらず、本稿で報告した名護岳が分布域の南限となる。

#### 引用文献

大平仁夫, 1987. 日本産クロツヤハダコメツキとその近似種について(コメツキムシ科). 越佐昆虫同好会々報, (64): 3–19.

(有本晃一 812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学大学院生物資源環境科学府昆虫学教室)  
(有本久之 大阪市)

#### 【訂正】

本誌 14 号 22–25 ページの短報「興味深いヒラタムシ上科およびゴミムシダマシ上科の記録」の 23 ページの図の説明で、以下の誤りがあったので、訂正しておく。

誤) 6, クロオビツヤヒメマキムシ; 7, ムネナガホソカタムシ  
正) 6, ムネナガホソカタムシ; 7, クロオビツヤヒメマキムシ

(生川展行 513-0015 鈴鹿市木田町 2399)